

# 山形大学附属博物館報26

THE MUSEUM OF YAMAGATA UNIVERSITY

2000. 3

## 目次

再びユニバーシティ・ミュージアムを目指して	中川 重 (1)
博物館雑感	横山 孝 男 (3)
資料紹介-山形城下寺院之図-	(5)
平成11年度事業報告	(6)

## 再びユニバーシティ・ ミュージアムを目指して

館長 中川 重

博物館長を拝命して早10ヶ月近く経った。その間、大学の状況は学内外ともに実に目まぐるしく変化し、正に21世紀の新しい大学像の構築に向けた目に見える胎動が始まったといえる。このような状況は、本学の附属博物館の現状や将来にとっても大きな影響を及ぼすだけではなく、大学博物館としてのアイデンティティをより明確にし、さらには実現可能な将来計画を緊急に立案する必要性を明示している。そこで、昨今の大学博物館を取り巻く状況とともに、今年度からスタートした本博物館の将来計画の検討状況などについて紹介してみたい。

まず、国立大学における博物館を取り巻く状況から見てみよう。我が国では博物館を設置している大学は欧米に比して極めて少なく、かねてから大学博物館の必要性が叫ばれていた。平成7年6月に学術審議会学術資料部会から、大学における学術標本の収集、保存、活用体制の在り方を検討し、大学博物館の整備の必要性と緊急性を訴えた「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について(報告)」という中間答申(本答申は平成8年1月)が出された。これを受けて、平成8年、東京大学に従来の総合研究資料館等を統合的に改組して「東京大学総合研究博物館」が全国の国立大学に先駆けてスタートした。次いで平成9年度には「京都大学総合博物館」、10年度には「東北大学総合学術

博物館」が設置された。

このような状況の中で、平成10年7月に、ユニバーシティ・ミュージアム像の確立と具体的な整備・設置の実現を図るべく、全国20余の大学附属博物館や資(史)料館等の代表者が集まって「国立大学博物館等協議会」の設立に向けての準備会が組織され、第1回協議会が同年11月27日に「京都大学総合博物館」で開催された。協議会の目的は「相互の緊密な連絡と協力によって、国立大学における学術標本の収集・保存・活用の向上を図り、もって教育・研究の進展に寄与する」ことであり、そのための「相互協力の推進」や「博物館等に関し必要な調査研究」等の事業を行うことが確認された。第2回協議会は昨年7月に東北大学で開催され、各大学博物館の収蔵標本について、共用可能なデータベースを構築するために、東京大学総合研究博物館を中心としたワーキンググループが構成され、フォーマット作成作業に入ったことなどが了承された。

この間、平成11年度には「北海道総合博物館」の設置と、「宮崎大学農学部附属農業博物館」が省令施設となり、専任教員の配置が認められた。平成11年6月には、学術審議会から「科学技術創造立国を目指す我が国の学術研究の総合的推進について―「知的存在感のある国」を目指して―」の答申が提出され、その学術資料の整備の項で、大学博物館が学術標本の情報提供を通じて教育研究へ資することの重要性を指摘するとともに、社会に対して大学を開放する上で大きな意義を有し、今後相当規模の大学には引き続きその設置を図っていく必要性が指摘されている。

また、12年度には名古屋大学と九州大学において博物館の設置が内定しており、徐々にではあるがユニバーシティ・ミュージアム設立への歩みが前進しているといえよう。

翻って、我が山形大学附属博物館の状況はどうであろうか。本博物館は学術標本・資料の収集・保存や常設展示のみならず、公開講座や特別展の開催、「古文書史料目録」の刊行、そして学芸員資格取得のための「博物館実習」を講講するなど、独自の事業を毎年実施してきた。このように多様な活動を継続実施している大学博物館は、国立大学の中には余り見られず、特筆すべきことと評価できよう。

一方では、博物館専用の建物・スペースがなく（現在は附属図書館の一部を間借り状態で、かつ狭隘）、専任の教官や事務官もおらず予算も限られているという「3無い」状態のために、貴重な標本・資料でさえ空調設備もない劣悪な環境での保存・展示を余儀なくされている。また、今までも何回か言われているように、「附属博物館はどこにあるの？」というキャンパス内の立地上の問題だけでなく、よく見え強く訴える活動が十分でなかったことも、附属博物館の存在感が薄かった原因としてあげられよう。

勿論、このような状況に常に甘んじてきたわけでは決してない。歴代の館長や博物館運営委員会によって、現状の問題点とその打開策や将来計画の検討が何度か行われ（詳細については平成6年3月に発行した『山形大学附属博物館・40年のことども』や『自己評価報告書』（平成7年3月刊行）に記されているので参照してほしい）、既にその中では、大学の教育・研究のための総合的な研究資料館の機能と同時に社会にも開かれた役割を果たすユニバーシティ・ミュージアムが構想されていた。さらに伊藤前館長時代には「山形大学総合研究資料博物館（仮称）」の概算要求書のための説明資料を作成し事務局へ提出している。

しかし、これが山形大学の現実の課題として具体的に検討されるまでには至っていない。その最大の理由は全学的にも、あるいは小白川キャンパスにおいても、博物館の活動が理解されておらず、ましてや博物館を活用し発展させていこうとする合意が未だ形成されていない状況にあることを率

直に認めなければならない。これでは建物や施設拡充はもとより、必要人員の確保や独自の予算要求もおぼつかないのは明らかである。

このような状況を打開するためには、何よりも博物館をより活性化しながら、大学内外における位置づけや役割を明確にして、存在感と必要性をアピールすることが不可欠であろう。そこで昨年12月7日、急速博物館運営委員会を開催して、現状を踏まえた実現可能な附属博物館を目指した将来計画を検討するために、「将来計画委員会」を設置することを提案し承認された。

2月8日開かれた第1回の将来計画委員会では、将来計画を当面の具体策などを中心とする短期的計画課題と、ユニバーシティ・ミュージアム創設と省令施設化に向けた方向性と条件整備とを目標とした長期的計画課題とに分けて段階的に検討することになった。とくに前者においては、博物館の活動・組織・運営などの現状点検と、その具体的な改善策を立てることを基本的目標として①所蔵する学術標本等を教育・研究の一次資料として体系的に整備—データベース化の促進など—すること、②展示方法の改善、③公開講座・特別展の充実化、④学芸研究員を核とした日常活動の活性化、⑤博物館情報の充実化とその発信の活性化などを検討していくことになった。

また、学内における博物館の認知度・存在感・必要性を高めるために、館長が中心となり、あらゆる機会を通じて学長をはじめ学内の各組織に積極的に博物館の実態や問題点を訴えPRすることも確認された。これらの検討内容については2月23日の定例運営委員会においても了承され、また、今後さらに綿密な具対策を検討するとともに、その実現化に向けて学長裁量経費を要求することも採択された。

このように、ユニバーシティ・ミュージアムの創設のために、再び新たなスタートラインに立ったわけであるが、まずは今できることを一つ一つ実行に移して実績を積み重ね、なおかつ前段で触れた学術協議会の答申を追い風にできるように、先行大学博物館の経験に学び、国立大学博物館等協議会との連携を保ちながら、計画目標の実現に向けて一步一步前進していきたい。附属博物館へのご理解とご支援ご協力を切に願う次第である。

（教育学部 教授）

## 博物館雑感

横山 孝男

### (工学部)

#### 旧米沢高等工業学校本館内「旧制高工・工專記念室」

当館が1973年6月2日に国の重要文化財に指定されたのを記念して本学の歴史を知るにふさわしい資料を収集展示し、後世に伝えることとなった。

特に本年2000年10月15日の米沢高等工業設立90周年を目指して各科・分野毎に促進することとし、ここ2~3か年を目途に学科の流れや学問分野の体系化をまとめ追加している。

校長・学部長室等には創設当時の校長制服、校旗等を含め明治以来本高等工業の校風を知る資料の数が展示されている。初代校長大竹多氣氏から今日の工学部長に至る歴代の肖像画や写真が納められている。

秦逸造教授は本邦人絹スワの製造に多大な貢献したとして本邦にあまわく名を馳せているがその偉業をたたえて特別に記念室を設けている。氏の学究生活だけでなく、語り草となっている研究に没する余りの「授業忘れ」などの失敗談も含まれている。実験装置は鉄道貨車を含めたあらゆるものを利用しており現代にも通ずる研究への情熱が窺える。氏にまつわる資料のほとんどは共同研究の担い手である帝人(株)にかなうものではないが所蔵する映像や文書資料が本学におけるそれらの片鱗を物語っている。技術者、更に経営者として米沢高等工業出身者には野に出て偉業を成したOBが多いが、晩年資料を本学に託すことも多い。それらは主に本館既存の同窓会室中心に展示・保存しており、同窓会員相互や在校生、それに教職員に供することで本学を改めて見直すことにつながっている。



各科ごとに今回充実させた展示室では学科単位の沿革を示すと共に各学科の紹介すべき特記事項を中心に教材、技術史・工学史上貴重な保存物を展示している。割り当て増面積は各科とも約54m<sup>2</sup>/一室となっており既存と合せて約1300m<sup>2</sup>が確保されている。工学系であるため重厚長大になりがちであるが、本重文には耐荷重性は無く、小さいものに限定せざるを得ない制限がある。その他にも重文としての制約が多々あり、例えば壁掛け展示の禁止、灯は傘付き白熱球といった具合である。



国の予算は勿論付いていないが、かといって学部予算から供出というコンセンサスは無く同窓会の発案ということもあってOB会に負担してもらっている。校費を日減りさせてまで工学史・技術史上成いは本学としての遺産を後世のために保存するというコンセンサスには至っていない。いずれにせよどのような保存すべき遺産が残っているか調べ上げようという附属博物館の計画は重要なステップとなるはずである。

理工大系大学や学部で独自の成いは他と一緒に学問の歴史(科学史、工学史など)や実業の歴史(技術史、農業史、工業史など)について展示室、引いては博物館を設ける大学は本邦においても決して珍しくはないが、日本工業大学の工業技術博物館は特筆に値する。建坪面積は本館3000m<sup>2</sup>、蒸気機関室175m<sup>2</sup>に達し、そのすべてが実物展示であり、大部分は動態保存化されている。専任の事務職員、複製製作スタッフ、専任教員、それに併任の館長で構成される。卒業研究の結実として復原した古機械の展示もなされている。即ち工学史や技術史が卒業研究として進められている。文部省の正式講座としてではないが卒論(卒業研究)としてこれら工学史・技術史を行っている大学は不特定多数の大学に上る。

## 何故違う、図書館・博物館・文書館

小生はリベラルアーツとは超遠い分野、つまり機械工学、の片隅で研究活動を行っている一人である。しかしある一念から機械工学・技術の社会における歴史を小生なりに紐解いている。ずぶの素人としての思い付くまでである。

図書館とはせいぜい国会図書館がその代表格と考えていた。ところが情報のソースを求めて大元の欧州を訪ねるようになって始めてアーカイブ(文書資料館)なるものを知る。そう言えば国会図書館がその機能も併設している。本学博物館もその機能があるし、他にも色々と思い当たって来た。しかし欧米のそれに比べようもない。小生の訪ねたアーカイブは特別な施設ばかりではない、むしろ小規模なものですらあった。ところが超一般の資料揃いである。まるで大昔にスリッパしたように生の資料をなぞれることができる。向こうの人は19世紀建築物の図面を広げて工事前の最終チェックをしているし、その又隣では古文書からノートパソコンで文章を模写している。ここでは研究のネタが何と無償で調べ切れないほど提供され得るのである。望みさえすれば。

本邦にもあるかもしれない。しかしそれはあっても大事にしまわれるだけで利用できるのはほんの一握りの人だけである。ここが基本的姿勢と確立された社会規範の違いと見た。ロンドンのインペリアルカレッジ。旅行者でもパスポート1つで閲覧し、資料のコピーを依頼し請求は大学へ直接可能であった。ミュンヘンのドイツ博物館文書局では待望の設計書を見出したが担当学芸員の協力の下で実現したもので、それは民間会社 Archive 部局からの寄贈書類の1つであった。

ロンドン科学博物館は世界屈指のもので国立であるが元はと言えば篤志家 Albert の寄附金を活かして設立されたものである。その博物館が社会に対するスタンスを変えつつある。これまでの専門的要素を弱め、社会へのインパクト重視、言い換えればより初等的展示にここ10年で変貌させつつある印象を受けた。それもそのはずで英国には数千の理工系博物館がありしかもその大部分はトラストで、ボランティアにより支えられている。しかも専門分化され、百貨店式博物館は大規模で多彩に拘らず概念的すぎるのかここ大英科学博物館

でさえ専門博物館に足を奪われつつある。

テムズ川上流の Kew Bridge Steam Museum へ週末に足を運んだ。産業革命を担った英国を象徴する蒸気機関が英国中だけでなく世界から集まっている。それらの動態展示が週末に、約30人のコアボランティアにより繰り広げられる。圧巻は1840年作で1940年頃まで実用されていた Cornish 蒸気機関で総重量24ton である。ピーム(作動桿)の真下で始動からすべてを拝見。人の大きさの10倍か100倍の象の足元でアンコを上げるのを見ているようなものだ。操舵手は親子連れの観客の前で恐竜をなだめるように定常運転へと導く。それでも無料である。ここで維持会員は約800人でサラリー付所員はたったの1人であった。インターネットのホームページも持っておりアクセス可能であるが、ここにはファックスだけである。さる日本企業が支援を申し出、ホームページの提供やアクセス情報のファックスによる仲介をしているのであった。社会的奉仕の質と量も企業のステータスとして定着しているゆえんである。そう言えばインペリアルカレッジ図書館蔵書の現代ものはほとんど贈書と語っていた。

文書館や博物館は究学者にとって教材の宝庫である。図書館はもっと広い意味の文化の畑である。大部前になるが1年半のオランダ留学経験でも1人当りの所蔵本数の少なさに気が付いた。同時に公共図書館の充実と利用率の高さに驚いた。日本では本を所持するがややもすると飾り物である。



1168 2 5/ Feb /00  
Kew Bridge Steam Museum, Cornish,  
Cornish Engine. 他機のパンプ種、これ  
だけで20トン、これがまるで魔法にかかっ  
たように蒸気の引き下でフワ〜と昇る。

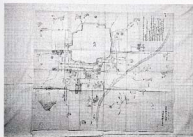
しかし彼らは所有しないが羨んでいる。ここに図書館等の公共共有知的財産の扱いの違いが明瞭に表われている。我々は知的財産を死蔵させてはいないか、百年の計で考えれば極めて貧弱な文化の継続と醸成でしかないか、

まだまだか細い個人の孤立した stand play おんぶの未充実文化国家なのかもしれない。

(工学部 教授  
附属博物館学芸研究員)

## 資料紹介

『山形城下寺院之図』 74×86cm 彩色



写真は平成11年度の購入資料『山形城下寺院之図』である。右上に、「維持嘉永六丑年 卯月吉祥日書之」と書付があり、嘉永6年(1845年)に写したものである。

八宗派を記号(▲真言 十天台 ○禪 △浄土 ×浄土 □法華 一時宗 ■一向宗)で識別し、山形城下の寺院の配置が一望できる。朱色に彩色された御朱印寺には領地高が記されている。御朱印寺を抜書きすると表1ようになる。

17世紀はじめ、江戸幕府の組織が整備されるなか、宗教界における封建的統制も強化されていった。民衆の信仰を収攬することは、領国支配を完全にするために欠かせない政策である。まず始めに、幕府は諸宗寺院法度を金地院崇伝に制定させ宗派ごとに公布した。これにより、僧侶の学問、儀礼を奨励し、階級を厳守させ、本寺・末寺関係の確立などをめざした。さらに、キリスト教を禁圧するべく、人々がいずれかの寺院の檀家になるように取り決めた。寺院が、その檀家であることを個人ごとに証明した帳簿を宗盲人別帳といい、これにすべての庶民を登録させた。18世紀の後半には宗盲人別帳が戸籍の役割を果たすまでになる。国教として保護され、隆盛を極めた寺院であった

宗 派	寺院名	領地高	現存の有無
▲真言	寶幢寺	1370石	○
▲真言	成就寺	960石	
▲真言	成徳院	270石	
▲真言	明孝院	53石	
▲真言	明覚院	28石	
▲真言	寶淵寺	24石	○
▲真言	龍福寺	20石	○
▲真言	梵花院	14石	
▲真言	新山寺	10石	○
十天台	柏山寺	300石	○
十天台	宝光院	278石	○
十天台	新白雲寺	100石	
十天台	如太仏堂	86石	
十天台	コマドウ	85石	
十天台	内御堂	55石	
十天台	宗福寺	44石	
十天台	東陣院	30石	
十天台	文殊院	8石	
○禪	光禪寺	251石	○
○禪	法持寺	200石	○
○禪	龍門寺	180石	○
○禪	長福寺	100石	○
×浄土	宝念寺	100石	○
×浄土	西光寺	14石	○
一時宗	光明寺	1760石	○
一時宗	正願寺	32石	
■一向宗	専修寺	14石	○
不明	行護院	105石	

寺社数28ヶ、総領地高6217石

表1 山形城下の御朱印寺(嘉永6年)

が、一方で、民衆を支配する行政の末端機関として組み込まれたために、宗教性が薄れ、御養・供養のための仏教という性格が強まっていた。こうして、幕府の一元的支配のもとに、徹底した寺社統制が行われたのである。

この様な、政治的支配と宗教的支配を一体化して進める政策は、大名諸国においても行われた。最上義光の領国支配にも、宗教政策を顕著にみることができる。義光は征服した天童氏の城跡に愛宕神社を創建して山形の寶幢寺を別当とし、天童氏の菩提寺弘向寺の寺領を削って寶幢寺領とした。また若松観音には山形の東陣院を別当として入れ観音堂を修築している。八幡の聖主として最も強力に抵抗した天童氏の旧領地には、政治的支配ばかりでなく、より以上に宗教上の支配に配慮していることが知られる。(山形市史より)したがって義光の宗教政策は、寺社領を寄進して寺社の経済的安定を図り、また、衰微した堂社を修復して保護するとともに、領内の寺社に対して厳重な統制の強化を図ったのである。

『山形城下寺院之図』の記述では、寺社数は78ヶ寺、うち御朱印寺社は28ヶ寺、城下の領地高が20,438石5斗4升5合4才とあり、寺社領の総数は6217石であった。戦国大名の多くは、自家の菩提寺や折願

所の寺社に寺社領を与えて保護したが、最上義光の政策にも同じことが言える。御朱印寺のうちでも、最上家開祖の斯波兼頼が開いた光明寺(時宗)と、山形城主代々の祈願寺である寶鐘寺(真言宗)が、群を抜いて多くの朱印領をうけているのが読み取れるだろう。「最上藤五郎總時代御家中井寺社方在町分限帳」によると、元和年間(1622)の山形城下の人口は19,796人、うち町人は16,055人、寺社方は3,641人とされ、寺社方が人口の18%余りを占めていたことが分かる。当時の山形城下の寺社数、寺社領は非常に多かった。この寺社数、寺社領の多さは同時代の他国にも類を見ない。義光の寺社保護が顕れた数値として注目すべきことである。政治的支配と宗教的支配の一体化が封建支配の在り方であることを、義光の政策は如実に示している。

保護によって、陸盛を極めた山形城下の寺院であったが、元和8年(1622)の最上氏改易は、寺社にとって、その保護が失われる大打撃となった。最上黒印寺は引き続き、幕府の朱印寺として城主の保護を受けることが出来たものの、次々と山形城主が交代するなかでは、安定した経済活動はできなくなったであろう。山形藩自体が財政窮乏に陥るなか、寺社の相対的地位も低下していた。上層農民や山形の商人から借金したり、経費を切り詰めながら、慢性化した財政窮乏から脱しようとするが、叶わず、廃寺に追い込まれる寺院も少なくなかった。現存する寺院は、御朱印寺28寺中14寺である。

## 平成11年度事業報告

平成11年度に本館で実施した博物館実習の参加者数は次のとおりです。(単位:人)

区分	1回目 8.17~20	2回目 9.20~24	合計
人文学部	20	8	28
教育学部	8	13	21
理学部	9	13	22
合計	37	34	71

平成11年度からの学年暦変更に伴い、7月中の実習及び秋季休業中の実習が不可能となり、日程

の調整に苦労したものの、関係教官のご協力により無事に全日程を終了することができた。

公開講座は、「人と動物-新しい関係をさぐる-」と題し、初めて生物に関するテーマを取り上げ開講した。講師・演題は下記のとおり。

### 講師及び講義科目

第10月16日 回(出)	・野生動物の保護と駆除 山形大学教授 伊藤 健 雄 ・淡水魚の分布と人為的攪乱 山形県立博物館学芸員 池田 正 明
第10月23日 回(出)	・水田とカラス 山形大学助教授 後藤 三千代 ・健康を支える動物たち 山形大学助教授 大和田 一 雄
第10月30日 回(出)	・ペットによる病気-特に寄生虫について- 山形大学助教授 斎藤 奨 ・人と動物-新しい関係をさぐる- 山形大学教授 中川 重

特別展は、平成11年11月8日から19日までの10日間、「人と動物はいま…」と題し開催され、公開講座の内容を、実際に目で見て理解していただくことができた。

### 平成10年度見学者総数

一般成人	個人	310 人
	団体	170
大 学 生	個人	1,804
	団体	130
児童・生徒	個人	12
	団体	19
合 計	個人	2,126
	団体	319
	総数	2,445

山形大学附属博物館 4C26 2000.3発行  
編集発行人 山形大学附属博物館  
〒990-8560 山形市小川町一丁目4-12  
(TEL) 023 (628) 4930 (直通)  
(FAX) 023 (628) 4909  
<http://lib3.kj.yamagata-u.ac.jp/library/hakubutan.html>